





「なっ……っ何これ……っ……っ」
「そっだ……。私あの怪物に呑み込まれてっ……意識が……」
「ここは……あの怪物のお腹の中？」
「触手が絡まって動けない……私……捕まってるの……」



「うっ……。まじ……臭いっ……気持ち悪い……」
「怪物の触手がヌルヌルしてっ……汚い……」
嫌っ……髪が呑み込まれてるっ……？
とりあえず早くこの触手を何とかして……外に出ないと！」



「このっ……離しなさいっーんっう……
はあああっ……」
（大丈夫っ……PPもまだあるっ……。
万全ではないけどまだ力も入るっ……！
反撃も来ないし……これならっ！）



「うーん……何……なんの感じ……。」
（気のせい……いや確し……。何がどうなるかわからぬ……。
凄く嫌な感じがする……。）
……うー？まさか今ので怪物に気付かれて……！……！

グッ

グッ

「じ…触手……来ないで…っ…」
「…近づいてくるっ…！私が抵抗しているのを止めだ…っ…
急いで拘束を解かないとっ…！
…あれ？何もしてこない？私のお腹の前で止まっ…」

「んっ」



「ひゃうっーっっっっっーっめっ……………」
（私のお腹に何が…触手から勢いよく噴き出っっっっっ）



「うぐ…あうううう…。はあ…はあ…う…。
これ…触手の粘液…汚い…何なの…」
「何とか耐えられた…凄い衝撃…。
お腹の前で何か爆発したみたいに…粘液叩きつけられて…」



「次が来る前に早く抜け出さ……えー？」
「嘘……っ……（？）」



「っ！？嘘っ！？スーツが溶けてっ……！？」
（力が抜けてっ……このままじゃ……）
大丈夫……変身は解けてないわ……。つまり完全に壊れてはいないはず……。
でも何時まで変身していられるかも分からない……。
……急いでこの状況を何とかしないと……っ！）



「うっ……♡身体が急に熱くっ……疼いて……。
これまさか……っ……!？」
「この粘液……まさか……催淫効果もあるの？
っ……生臭い……。臭いを強く感じる……呼吸もしにく……っ。
明らかにさっきまでと違う。身体も火照って……。
まさかスーツの防護機能が……!？」
駄目っ……もう少し耐えてっ……お願い……!」



「……」
触手の先端から何かが出て……小さな……宝石……」
（また何かされるの……？駄目……まだPPはあるのにっ……もう力が入らない……
手足の触手も振りほどけない……っ……。これじゃ防げないわ……。
お願い……何もしないで……っ！）





「ごほうっ……あうううっ……はぁ……はぁ……
へっお臍にあの宝石埋め込まれっ……!?」
「こんなことされたのに痛くない……それどころか……
何でっ……お臍気持ちいい……っ……♡
これもさっきの粘液のせい? 一体この宝石は何なの……?
駄目っ……んうう……この宝石お臍の穴にしっかりとハマって……っ。
お腹に力を込めても外れないっ……」

え……

ん

「うぐっ……何これっ……!!？ああああ!!」
「この宝石から……お臍に……身体の中に何か入ってくる……!!」
「どんだん何かが伸びてきてる……」
「私に根を張るみたいにつ身体の中に絡みついて……」
「んあああ♡これ以上は駄目っ……やめてえええ!!」



「んっんっんっ…はあ…はあ…♡
んっんっ♡力が…PPが吸われて…そんなっ…。
っぐ…代わりにお臍の宝石から何か流れ込んでくるっ…この力は…!?」
（この力…嫌な感じがする…っ…。身体の中に染み渡っていく…っ…。
お願いっ…もうやめて…この宝石を外してっ！外してえええー!）





「あ……う……う……は……は……は……ん……ああ……♡」
（駄目……全能力が入らない……PPが吸い上げられて……
全身が得体のしれない力に染められていく。
さつきから凄く身体が熱い……アソコも疼いて……う……。
これじゃもう自力ではどうにもできないわ……。
きつと創ちゃん達が助けてくれる……それまでは耐えないと……。）



「右目がぼやけてっ…視界がおかしい…。
髪も元の状態に戻りかけてる…私…どうなっちゃうの…?」
（PPももうほとんどない…。）
けどあれからそこまで火照りや疼きも強まってるのではないの？
ここの臭い空気をたくさん吸い込んで、粘液もかなり身体に染み込んでる
はずなのに…。」



「うっ……何……この臭い……あのタンクの得体のしれない液体が
毛先から毛根にまで染み込んでくるっ……」



「何これっ……うっ……臭い……何なのっ……」
（私の髪が……この空間でもはつきりとわかる臭い……臭く……
あの粘液を濃くしたみたいな酷い香り………こんなものっ……）



「ひゃっ？髪から液体蒸発してっ…んああ♡この香り…いりり♡」
（私の匂いと混じって変わったの…？）
臭いけど…ああ…いい…エッチな匂いがする♡
何で？自分の匂いで感じちゃってる…っ…♡
あれ…？髪の色が変身した時の色に戻った…？）



「っ！？触手が…っひゃうっ♡やっめえ…っ♡」
《急に触手が活発になって…っ？何が起きて…っ…っ》
絡みついた触手が固くビクビクッて…粘液もこんなに滲み出てる…。
まさか！？私の髪…この匂い…反応してるのっ…っ！



「あぐっ…お臍の宝石がつ…こんな時に…っ…ああああ♡」
「残りのPP吸い出されてっ…触手がこんなことになっ…てゐるのだ…」
「もう抑え込めないっ…駄目えええ！」



「エクステバイスが……ない……？何でなの……？」
変身が解けっ……ただわ……まだ変身してる状態……。
（スーツが消滅したただわ……まだ変身してる状態……。
っ！？お臍の宝石……私の身体に馴染んで……身体の一部になってる……。
何故かデバイスに近い力を感じる……。
私のPPだけじゃない……エクステバイスそのものも吸い尽くしたの……）」



「んっ♡…触手がお尻にっ…やめっ…♡」
（触手？お尻の穴が弄られてっ…
粘液塗り込まれながらどんどん広げられて…いやああ♡…）



「んぎゅっ!? 触手がっ…お尻に挿入ってきてるっ…
やっ…んあああ…♡」



ズン

「んぁうっ♡…私…お尻で感じちゃってる…っ…。
拡げられたお尻の穴だけじゃない…。
お腹の中にも触手の粘液が…っ…♡」



「んっ♡今度はっ…ひゃっ♡私のまん」ど触手押し付けっ…
やっ♡…そっちは駄目ッ…！お願い！やめてええ！」





「あっ…やああ♡抜いてっ…これ以上は駄目え…っ…」
（私の膣内の奥まで挿入ってきてっ…
そっちは…そっちだけは駄目なのにな…っ…!）



「あっ♡んああ♡んふううう♡」
（私の膣内っ…掻き回されてるっ…奥まで突き込んでくるっ…。
駄目なのだ…感じさやうっ…♡）



「んほお♡…んじゅっ♡…ひやめっ♡…んむっ♡」
（これっ…私の舌に汚い粘液絡めてくるっ……ん？
不味い…っ…臭いっ…汚い…っ…やあああ…あ…♡）



「おっぶーんじゅっ♡んぶっ♡」

《急に激しくっ…？》

膣内もお尻も口の中も…触手じゅほじゅほ突き込まれてるっ♡
駄目っ…感じちゃってる♡…ごめん創ちゃん…もう…私…っ…）



「ぶふっ……んぶっうううっ……」
（私の一番奥で触手ビクビクっって……まじがっ……
やめっ……）





「うわー」

「うわー」

「んっっっ♡…っっっ」
（私っ…触手にイカされちゃった…っ…でも…気持ちよかった…っ♡
おぶっ…苦しっ…。もう気は済んだでしょ…
触手を早く抜いてえ…。）



「ごほうっ…ぶふっ…いっ…んっ…うっ…♡」
（口の触手が暴れてっ…口の中に残ったとれっ…
全部飲めっ…というの…？）
やっ…掻き回さないでっ…！
わかった…わかったからあ…いっ…っ…うっ…♡）



「んくっ…んくっ…ぶぶっ…うっ…んくっ…んくっ…うぶっ…♡」
（流し込まれた時とは違う…味や臭いを凄く強く感じる…吐きたい…
これっ濃い…喉に絡んでっ…少量だと中々胃まで降りていかない…
創ちゃんのと全然違う…汚いっ…不味すぎるっ…）



「ふーっ♡…ふーっ♡…おぶっー!!…なにやドー…んっんっん♡」
（全身が熱いっ♡）
注がれたのが…飲まされた汚いのが身体に染み込んでっ…
身体に何か起きてるのー!?
お臍の下…熱いっー!!…力が集まってる……?）



「うっ♡…んん♡」
「お腹に何が浮き出っ♡…何…この紋章…？」
「何でこんなものが…っ♡」



「お臍の宝石にこの紋章…染められた髪…。汚い精液も注がれて…。私の身体…何かされる度どんどんおかしくされてる…。」

（でもどうしてなの…？）

何度も快感に飲まれそうになったのに…あんなに気持ちよかったのに…。何処か物足りない…。

正直…認めたくはないけど…創ちゃんにしてもらった時よりも気持ちいいと感じてた…。それなのに…。

でもおかげで正気を保ててる…諦めかけてたけどこれならまだ…。」



「っ♡お臍熱いつ…これってまさかっ…PP？
エクステバイスもこれに吸収されて…じゃあもしかして…！？
いや…こんな得体のしれない力に頼りたくない…
でも今はこれしか…っ…！
少しでも可能性があるなら…！
ブライトフェザー…エクспанションッ！」



「あぐっあぐっ……」
「やっぱりいっつもど違うっ……」
でも諦めないっ！こんな宝石に負けない……！
エグステディアの力を返してもらっわっ！はあああ……！」

えい



「はあ…はあ……出来…た…？
やったー！これなら…っ…」
（スーツは損傷したままだけど…
取り戻した…変身できた…PPも溢れてくる！
でも何…やっぱり違う…
スーツがヌルヌルして…浴びた粘液のせい？）



「あう…あ…れっ…っ…ぼーっとするっ…何ぞれっ…意識が…」
（身体がだるい…凄いPPの消費…っ…これじゃあ全然足りない…。
駄目…せっかくまた変身できたのに…っ…これじゃまたっ…）



「創……ちゃん……み……んな……」



「まさか女王の力と化したスーツを自力で取り戻すとはな…。
だがワームとして不完全な身体ではそれはまだ扱えない。
いずれワームとなれば姿も変え、お前に相応しい形へと変化するだろう。
それにしてもエクスティア…素晴らしい素質だ…。
ルクイエの体内の催淫地獄にも堕ちることなく平然としているとは。
我がワームの女王の一人としてお前を覚醒させてやらねばな。」

「ルクイエ…引き続き体内でエクスティアのワーム化を促せ。
そして我の元へ連れてくるのだ。
エクスティア…直接会うのを楽しみにしているぞ。」



「あー♡……んあ♡んひゃん♡……気持ちいいよ……♡
せー♡……♡なう……♡」



「おぼっ！？んおおお♡」
「創ちやつ……？違っ…そっだ…私は…っ！」

アッ！

アッ！



「やっぱりこれ…苦くて不味い…臭い…ああ…でも…
飲まなきゃ…っ…」

「この子が…創ちゃんみたいだ…私の為に泣いてくれたらいいんだものっ…♡」
「んぶっ…んううっ…♡」



「んっ！んっ！んほおお…♡」
「うー？私…今何を考えてっ…？」
「精液…身体に取り込むことを当然の事みたいを受け入れて…」
「…これはしようがないのっ…これ飲まなきゃまた口の中…」
「無理矢理掻き回してくるからっ…」



「んっ♡んっ♡♡じゅるるっ♡」
「あれ…濃くて酷い味のままなのっ…あんまり抵抗がない…。
回塞がれてるのに苦しくもないし…吐き気もない…。
精液喉に絡ませながらでも…普通に飲んじやってる…。
…どうなっちゃってるの…私…?」



「ぶはっ……んぶっ……♡うえ……♡んんん♡」
（水位が上がってる……あれがなんのへんちを絶つ……。
うっ……お腹タプタプしてる……これだけ射精されたの……私……）



「んひっ……!?」
嘘っ…私の中の精液…PPとして一瞬で身体に溶け込んできてっ…。
（…私…触手でこんな感じちゃってたの…?）
ううん…これはきつとさっきまで創ちゃんとしてた夢を見ていたから…
それだけ…それだけなの…。
でも変身解けて…やっぱり駄目だったんだ…。
それに力が縛られてるみたい。さっきみたいにもう変身できない…。）



「へっ何この角…。嫌…私の頭から生えてる…。…？
嘘でしょ…。…っそんなことって…。」
「私…このまま…身体おかしくなつて…。
……怪物になつちやうのかな…っ」



「つiiiiっ♡またお尻に…
触手が挿入ってえ……！」



「やっ……どどん奥まで来てるっ♡
ずつと挿入られてたから……簡単に受け入れちゃってる……。」
「お尻敏感になつて……へ？何処で蠢いてるのがも感じれる……
何で正確にわかるのっ……。こんなのおかしいっ！
やっ……気持ちいいとっっ……擦りつけてくる……♡」

「やっ……どどん奥まで来てるっ♡」

「お尻敏感になつて……へ？何処で蠢いてるのがも感じれる……」

「いぎっ♡やっー！触手っっ…固く大きくなってるっ…!?」
お尻っっ…きっちり固定されてるっ♡」





「はぁ♡…はぁ♡…何？お尻の穴…まだ…塞がれてる…っ…？
やっ…ん…いいいい♡…これ動いて…る…♡」
（んっ♡これっ触手挿入ったまま…っ…
きゅちりハマってびくともしないっ…
それに…お尻の穴締めようとする…と…ビクビクして震え…
余計感じちゃう…。
こんなの嫌っ…お願い…外してえ…！）



「今度は細い触手…？
お願い…もうやめて…これ以上何もしないで…」



「いぎっ♡私の膣内につ…子宮まで…♡」
「どんどん奥に入り込んでくる…っ…
ふっっっっんなっっっっ…♡」



「ひゃららら♡おっぱいはらめっ♡んああ♡」
（嘘っっも……っっちやんも……）
乳首の穴っっ開けられて……ああ♡気持ちさらさらっ……）



「ほひっ♡うっ♡…っんああ♡は——っ♡は——っ♡んっ♡
おっばいっ…んいっいっ♡何がされてっ…♡
子宮の中にも入ってきて…奥まで…来てるっ…♡」





「ぶぐっ♡…はあ…はあ…今の…は…」
（触手から出た何かが固いのが子宮の奥…おっぱいの中にも…埋め込まれて…？
これ…お臍のと同じ感覚がする…！…ま…またがっ…）



「へ？目は何か…あひっ！？これっ…んあああ♡はあ…♡はあ…♡」
（おっぱいが…子宮も変…凄く熱い…お臍の時と同じだわ…
私の身体と同様…いや…
あの宝石を直接埋め込まれたってことはそれ以上に…
怪物の身体に作り変えられてるんだ…）」



「んむっ！っむぶっっ！あむっ♡」
「この味と匂いっ…口にまた触手がっ…やだっ入れないで…
もう飲みたくないっ…」



「じゅるるっ…はむっ…♡んちゅっ…ちゅるるっ♡んちゅるるっ♡」
（飲ませられてる…駄目っ…これ以上は…なのだっ…）
身体がこれを求めているっ…っ…汚い精液自分から飲んじやっつてるっ…
欲求に逆らえない…っ…どうしてっ…っ…？
おっぱい…子宮も生まれ変わって…っ…
怪物の赤ちゃん孕めるようになってっ…っ…♡（♡）





・胸及び子宮のワーム化

重要器官となる双方には、臍に埋め込まれた核と同等の水晶体が埋め込まれ個別の処置が施される。

再び精液を注ぎ込み、肉体変化に必要な栄養を賄う。

エクステバイスを吸収した臍の核と連動し力が供給、ワームに最適化する。

エクスティアに負担が無いよう安定した母乳の供給、更に妊娠を行わせる。

・子宮

卵巣それぞれに埋め込んだ核が子宮を作り変える。

ワームの精子のみに反応し、相手に適した形で仔を成し出産または産卵する。

安定して供給され度重なる出産にも衰えたり壊れることはない。

ただ特性止並大抵の精子ではPPとして取り込んでしまう。

・胸

それぞれの乳房に核が埋め込まれ、母乳が泉のように湧き出す事が可能。

大きさは変わらない。母乳供給量が増えると一時的に巨乳化する。

通常時はワームが好む母乳。妊娠時には子宮で遺伝子を読み取り、その仔により最適化した母乳となる。

4.ワームへの転生

視界が塞がれ肉体がより敏感になる中で、エクスティアは与えられる精液を飲み続ける。ワーム化が進み、嫌がっていたその風味に彼女は好みになってしまう程に順応していた。それを養分に肉体は更に変異を遂げる。

人間に比べ、感覚がより研ぎ澄まされたエクスティアは自分の身体がもうどうしようもない状態になっていることを見ずとも理解する。

呼吸も不要…ワームの体液のみで生きられる身体…意思とは関係なく周囲に振りまかれるワームのフェロモン。

それにより常時湧き上がるPP…発情し疼く肉体。

…もう人間としては生きていく自信はなかった。仲間達にもこの姿をさらしたくない。しかしクィーンと強く同調してしまったことで彼女の自我は折れることなく保たれていた。我を保ったまま永遠の快樂を楽しむためクィーンが遺伝子的に残したものだ…。

・現在はクィーンとしてのキングへの愛の想いが創真への愛へ置き換わっている状態。

これにより、既に快樂に堕ちた彼女も創真への愛と、彼が信じるエクスティアとしての使命を抱き続けている。

他の相手に快樂で魅かれる事が無いようにというクィーンの想いがエクスティアの心により歪み、呪いのような形で現れた。



「んちゅっ…♡じゅるるっ♡レロレロ♡んむっっ…♡」
「苦くて臭いのいい…っ…美味しい…っ…♡飲むのやめられないうっ…
感覚で伝わってくる…身体の事全部わかる…。
見なくてもわかる…私もう人間じゃない…っ…
この怪物と同じ種族に生まれ変わったんだ…。
もう私…完全に諦めてる…この快楽に心からずっと浸かりたい…っ…。
でも…怪物への敵対心が捨てきれない…っ…。
創ちゃんとするよりも凄く気持ちいいのに、創ちゃんの事想ってる…。
…何で…忘れられないの…？」

「ふはっ…ああ…♡」
（変化が終わったから…怪物になってすく身体が楽になった…。
最初と違ってもうだるさもない。
今は力が入らないことと全身が疼くだけ…っ…。）



「んあっ♡そとやっ♡はひりひりっ♡」
《乳首とクリオリス…っ♡何か絡んでっ♡んひりひり♡》





「はあああ…♡はあああ…♡んあああ…う♡」
（何がなになの…♡…何がわかんないの♡…
いっしょいっしょいっしょ♡…寂持ちなの♡…♡）



「うあ……目隠しがとれた……？」



「……う……う……本当に……っ……これ私……」
（これさっきの……ピアス？こんなところ……
あれ……目のぼやけもない……前より良く見える。
身体が楽……粘液まみれのこの空間が心地いい……っ……♡
……感覚でもうわかってた……見た目は人に近いけど中身は全然違う。
私……本当に怪物にされて……怪人に生まれ変わったんだ……）」



「っ!?!目の前の肉壁が開いて…っ!?!
もしかして創ちや……違う…誰っ?」



「ルクイエ、」苦勞だった。ほう…素晴らしい仕上がりだ。
我はワーム・キング。貴様を我々のクイーンに覚醒させた者だ。」

「貴方がっ！？……離さないっ！……どこから出してっ！」

「出てどうなるというのだ？」

エクステリアでも人間でなくなった…ワームのお前がこれ以上何をする？
回にしないという事はわかってるのだろう…。

もう我を倒しても元には戻れないと？」



「うー!? お臍が熱い…これ…エクステバイスっ!」

「お前の枷を外してやったぞ。
これからその力を存分に使わせてやるう。
さあ見せて見る。女王として覚醒しているかな。」



「うー？身体が動く…力も入る！
どうゆうつもりなの…？
でもやるしかっ！大丈夫…前みたいにはならない…。今の私ならこれも扱える！」
「ブライトフェザー！エクспанション！」







「これは……？光触戦姫ワーム・エクステリア……？」
（変身出来た……？これが今の私のエクステリア……。
凄……！絡みついた触手の生気も完全に吸い上げちゃった……！）



→1・敗北✓

「はあああ!!」

(このスーツ…私の全身ですずっと触手が蠢いてる…感覚はないけど何度も絶頂して…っ…。
こんなの嫌だけど…でもそのおかげで力が沸いてる。いけるわ…これならっ!!)

「っぐ!!」

(強い…まさかこれほどまでに進化しているとは…。
こいつ…我に逆らわない様に促すクィーンの本能すらも押し殺している…。)

ワームとして覚醒したエクステリアの力は想像以上だった。
怪人となった真里奈は与えられたその力を使いこなし、キングですらも優勢に戦えていた。
PP増幅の為の絶頂を彼女は何度も迎えているが、感覚操作が施されており戦いに支障もない。
やがてキングに隙が生まれ、ワーム・エクステリアはとどめの一撃を放とうとする。

「これで終わりよっキング!…フォトシツ……」

「いいのか? 我を倒せば本当に人間に戻れなくなるぞ…!!」

「っ!?!」(嘘っ…まだ…私…人間に戻れるの…っ?)

エクステリアが攻撃を放つ寸前に放たれたキングの一言に、怪人化した彼女の決意が一瞬揺らぐ。

「くくっ…悪いなエクステリア…。」

「しまっ…あぐううう!!」

その一瞬の隙をキングは見逃さない。
重い一撃を脇腹に打ち込まれ彼女は肉壁に叩きつけられる。

→1・敗北✓

ピクッ♡…ピクッ♡

「あ…ああ♡そう…ちや……ああ♡…ごめ………」

「想像以上の個体を生み出したなルクイエ…。

肉体が不完全だが仕方ない。早く我が手中に収めなければな。」

ググッ！

「っぐああ♡」

キングは弱り切ったワーム・エクステリアの四肢を抵抗出来ぬように掴み、最後の仕上げを施そうとしていた。

「はぁ♡…はぁ♡…んぐうううー
離してっ…んんっ！？っぐ…あああ♡」

「…まだ力はいらない…っ…振りほどけない…。
キングの顔…こんな近くに…ってううっ♡
これは…何でお腹が疼いちゃってるの…？」

んんっ…

「無駄だ。ルクイエの力で得たPPもほとんど使い
切ったのであろう？
しばらくはまともに動けまい。
くくっ…完全に発情しているな。
ようやくクイーンとしての自覚が芽生えたか。
…では早速我の仔を授かってもらおうぞ。」

「ふ…ふざけないでっ！あなたの仔なんて…っ…んひっ…！」

（駄目…考えただけで子宮の疼きが止まらない…。
私…倒されてからキングの事…意識して…。
…っ！…っ！…流されちゃ駄目っ…。
しっかりしないと…。）

「お前のフェロモンの匂いも素晴らしいぞ。
我も欲望を吐き出したくなるくらいだ。
これならワーム全員を虜に出来よう。
さて…先に少しルクイエの改造成果を確認させてもらおう。」

ドッ!

おっ!

じわっ…

★

「んっ!?
おっぱいやめっ…んあああ…♡」

（乳首舐められてる…
キングの舌が…っ…気持ちいい♡
駄目っ…母乳が溢れてきて…感じちゃってる…。）

「ジュルッ…うむ。美味だぞエクステイア。
まだ仔を孕んでもいないのに母乳は
すっかり仕上がっているな。」

「あっ♡やっ♡…もうやめっ…!」

（これ…触手の時と全然違う…っ…。
おっぱい敏感過ぎて…。
創ちゃんの時みたい…ううん…それ以上…。
ワームになった今の身体がキングの事求めちゃってる…。
こんなの駄目…抑えられない…すぐイっちゃう…っ♡）



はひあっ!

やっ♡

やっ

「はーっ♡はーっ♡…んああ♡…」

「イカされちゃった…♡」

少し乳首舐められただけでこんなになるなんて…。

怪物の体内に閉じ込められてた時と全然違う…。

創ちゃんにされるよりと比べ物にならないくらい…。

…本当に気持ちいい…っ…♡」

「量も味もいい母乳だ。」

お前の素質もあるだろうが…ルクイエもいい仕事だな。
仔を孕めば更に母乳が洗練されるだろう…。」



「あ……う……う……♡……」

「これくらいで何を朦朧としている？
お前も自らの母乳を味わってみろ。」

「んむっ……じゅるるっ……んむっうっうっ♡♡」

（キングの舌がつ……やあああ……♡
これ私の母乳……？それにキングの唾液と合わさって……
ドロッと絡みついて……臭くて……
触手に飲まされてた精液と少し似てる？
でもこっちの方が……甘くて……美味……しい……♡）

「んじゅっ♡…♪ロ♪ロ♡…んっ…んんっ…んんっ♡」

（駄目……）

…母乳舐め取って…自分から舌を絡めちゃってる…。

私…こんなことしたくないはずなのにっ…抑えられない…。

身体が求めている…私の母乳も…キングの…唾液も…っ…♡）

「んむっ！…っんうううう…ぶはっ！…はーっ♡…はーっ♡…」

「短時間で随分積極的になってきたな。

お前の意志がクイーンに染まりつつある証拠だ。
よし…胸は問題ないようだ。次は…」



「あうっ…ひっ…！…これ…っ…嘘でしょ…？」

（ピアスから…私のクリ○リスに力が流れこんでっ…。
嘘っ…これ…おち○ちん…っ！…）

「変化完了…そちらも問題なく機能しているようだな。」



「このピアスは何?...何をしたの...?」

「それか?お前が今体感した通りだ。
胸の方は母乳の質と量を高める。
そしてそちらの方はお前のそれを
一時的に男性器のように作り変えるものだ。
見た目だけではないぞ...。
当然お前の知るものと感覚も同じ...射精も出来る。」

「っ!?!...変化させたってことは...まさか...」
(射精も...まさか!?!...嘘でしょ...。
私のおち○ちんに何をするの...?)

「ルクイエ…傷が痛むだろう？
褒美に新たなクイーンの精液と母乳をやるう。
好きなだけ吸い出してよいぞ…回復に努めよ。」

「駄目…まっ……!?…んあああ！」

（私のおちんちん…触手に食べられて…「シ」がれてるっ♡）

「ひゃうっ♡おっぱいっまでっ…んあああ♡」

「これでお前がクイーンと完全に自覚するまでは
そこから力が吸い出される。
いくら感じてもお前はエクスティアとしての力も使えない。」



「そんなっ…んあああ♡これっ…おちんちんに吸い付いてっ♡」

（漏れ出してるこれ…髪に染みついた粘液と同じ…。

わたしのおち○ちんになったクリ○リスにもにも染み込んでくるっ♡…）

「偶然とはいえルクイエはお前が傷つけたのだ。

責任はとってやらないとな…

お前が生まれ変わった記念の場所だろう？クイーン？」

「っ！？…私は…クイーンじゃ…んあああっ♡」

「クククッ…まだ堕ちていないか。

いつまで耐えられるか見物だ。

では待たせたな…子種を仕込むとするか。」



「ひっ！...嘘でしょ？...こんな大きい無理よ...やめて...っ！」

（私...挿入れてほしいって思ってる...。
駄目っ...駄目なのにつ...。）

「人間の時であれば無理であったな...
これを挿入したら最悪お前は死んでいただろう。
だがワームとなったその身体なら何ともないはずだ。
...さて...では最初の仔をしっかりと孕んでもらうぞ。」

おっ...♡



「意識をしっかりと持っておけ。
仔を成す前に壊れられても困るからな。」

「あはあああ♡んいいいい…んむっ…♡じゅるる♡♡」

「アソコに大きいのあたってる…キングの舌がまたっ…。
駄目…！とんとん頭の中がふわふわして…。
私の膣も伸縮して受け入れる準備してる…。
ワームになったこの身体が…キングの事を…全身が求めている…。
ああっ…。創ちゃん…ごめんね…。
これを挿入られたら私多分耐えられない…。
もう…私じゃなくなっちゃう。」

ヌ…

じゅる…





「んむっ…ぶはっ…う…あああ♡」

「クイーンとはいえまだお前は人の形だ。
やはり少々強引か。
だがすぐに馴染んだな…では動かすぞ。」

「あっ♡あっ♡気持ち…いいっ♡キング…様っ♡」

（あっ…凄いつ♡…これっ…好きっ♡）

ズム

ズム

「ああ♡キング様っ♡いいっ♡気持ちいいっ♡」

（創ちゃんへの想いだけじゃない…。
突かれる度にみんなの事も…私が…完全に壊されて…。
ワームの私に生まれ変わっていく…でもいいの。
こんなに気持ちいいんだからっ♡）

「身体だけでなくようやく心ももう染まったようだな。
さて…そろそろ射精すぞ。
我の子種を受け取るがいい。」

グハッ♡

「あっ♡あっ♡キング様っ♡お願いしますっ♡
私も射精するっ…さっきはごめんねルクイエ♡
貴方のおかげで私…生まれ変わったのに…。
お詫びに貴方も私のミルクっ…沢山飲んで…っ…♡」



クッ

グッ

グッ

[illegible]

「う……ああ……あ♡」

（キング様の子種…沢山身体に染み込んで…でも駄目…まだ孕んではない…。それにルクイエにももっと私のミルク…飲んでほしい…♡）

「キング様…まだ足りません…もっと……♡」

「よかるう。我もそのつもりだ。続けるぞ。」

「#うっ♡はむっ♡ふっ♡とさっ♡じゅん♡♡」

「う……ああ……あ♡」

(キング様の子種…沢山身体に染み込んで…でも駄目…まだ孕んではない…。それにルクイエにももっと私のミルク…飲んでほしい…)

『キング様…まだ足りません…もっと……♡』

「よかるう。我もそのつもりだ。続けるぞ。」

「#うっ♡はむっ♡ふっ♡るっ♡おんぬ♡」
「♪en en♡♪」

「う……ああ……あ♡」

（キング様の子種…沢山身体に染み込んで…でも駄目…まだ孕んではない…。それにルクイエにももっと私のミルク…飲んでほしい…♡）

「キング様…まだ足りません…もっと……♡」

「よかるう。我もそのつもりだ。続けるぞ。」

「#うっ♡はむっ♡ふっ♡とさっ♡じゅん♡♡」

「う……ああ……あ♡」

(キング様の子種…沢山身体に染み込んで…でも駄目…まだ孕んではない…。それにルクイエにももっと私のミルク…飲んでほしい…)

「キング様…まだ足りません…もっと……♡」

「よかるう。我もそのつもりだ。続けるぞ。」

「はっ♡はっ♡はっ♡ちゅっ♡ごめん♡♡♡」



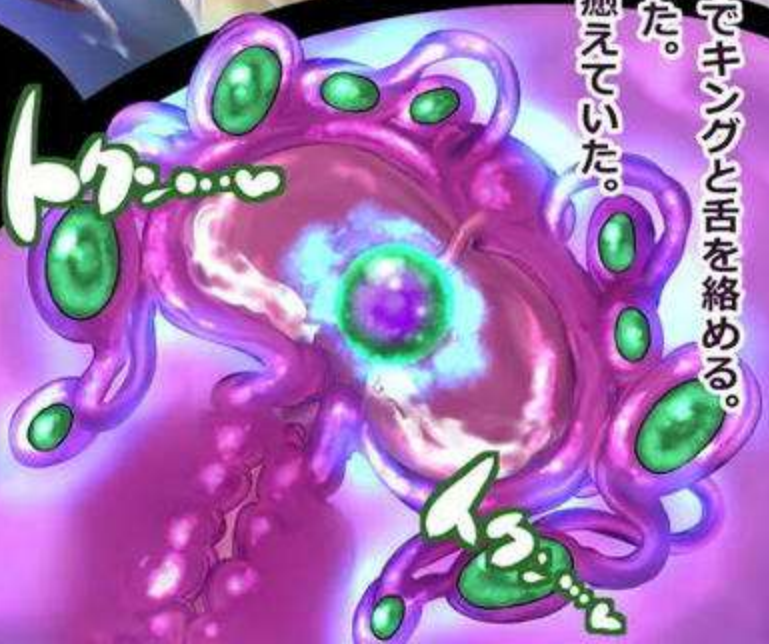
ワーム・クイーンとなつてしまったエクステリアは無中でキングと舌を絡める。
あれからキングが子種を注ぎ続け、彼女も遂に妊娠していた。

クイーンの母乳と精液を吸収したルクイエも今は完全に癒えていた。

キングの精液とそれで生まれたPPを吸収し、彼女は更なる進化を遂げていた。

キングの巨大な性器を受け止めていたにも関わらず身体は何事もなかったように回復している。

「キングしゃまっ♡おいひい♡レロッ♡んちゅっ♡んっ♡」
（キング様とのキス…凄くいいっ…♡
でもこのままじゃ駄目…。
私は気持ちよくなれてもキング様は…。
おち○ちんも…舌も…ちゃんとご奉仕してあげられない…。）



「ふはっ♡…はぁ♡はぁ♡…キング様…?」

「どうしたクイーン?」

「今の私では少し物足りないんじゃないですか…?」

人間としての…以前の姿ではそのおち○ちん…

ちゃんと気持ちよくしてあげられません…

だから…もう少し時間をください…

貴方に相応しい女王となつてお腹の仔と戻りますから…。」

「いいだろう。だがどうするのだ?

既にお前のワーム化処置は全て完了している。

それでその姿を得ているのだ。これ以上は…。」

「それについては私に考えがあります…。」

あの時は私も人であろうとしましたからこの姿でいるのです…。

だから今度は…。ルクイエ…お願いできる?」

























































































